

# 校友会報

# 117

## 目次

新宿に来て・見て下さい

南雲 芳夫…………… 1

新しい時代に向けて

北郷 薫…………… 2

日本の製造業はこう変わる

只野 文哉…………… 3

ソーラーカーの研究

住野 和男…………… 6

学園だより

大勝 靖…………… 8

平成7年度支部総会報告…10

盛況ノ工院大異業種懇話会

京滋支部……………12

部会報告……………13

総会開催のお知らせ……………14

お知らせ……………15

震災募金者名簿……………16

決算予算……………18

編集後記……………20

全国大会のお知らせ……………21

●ごあいさつ



新宿に来て・見て下さい

校友会会長 南雲 芳夫

今年の寒さはいかにも冬でした。何かそれらしいというのが久方ぶりの感が致します。安堵感があります。春も春らしかったし、だから夏も夏らしいことを期待しています。校友各位におかれては公私にわたって各界にてご活躍のことと存じます。

始めに、やはり阪神大震災で大変な被害をお受けになった校友及び学園の関係各位に、「ともかく頑張ってください」と工学院校友全員が心から願っていることを記したいと思います。あれから早くも一年です。そこに住み生きる人間にとっては、時の経過と共にその爪痕のひどさが消えるのではなくより赤裸々になっていくものだということを私たちも知りました。校友会としてもご援助の手伝いぐらひはさせていただきましたが、とてもとても及ぶものではありません。

前回の会報(116号)に、神戸支部の石田俊文氏(建築・昭和49年卒)の、地震後の火災と崩壊の煙がまだ漂っているような緊迫した手記を掲載させていただきました。今日、少し冷静に読み直すと、不運に対する悔しさとそれでもやり直さねばと言う敢闘精神に思わず目頭が熱くなります。神戸でこんな人にも会いました。震災で学んだ命の大切さ、そして人と自然とのつながりの中から「食の自給」を見つめ直している方でしたが、「地震直後水が不足していた。でも、目の前には川は汚れているか、コンクリートで固めているかで、

汲もうにも汲めない。だいたい川に降りる階段さえなかった」と言う。都市では川一本でさへ私達から遠ざけられています。見慣れた当たり前の風景がとんでもないものに見えてきました。

暮らす人間にとって優しい社会への変革が盛んに言われています。学園の新時代への対応もこのあたりに進む方向があるのでしょうか。修学人口が激減する中で本学園の各学校の志願者が去年ぐらひから少し増えてきたと聞いています。更に、高等教育で大切な大学院部門の充実はこの数年の間に目を見張るものがあります。私たちの学園の技術教育が着実に成果を上げているのでしょう。工学院からの新しい人材が、時代に歓迎され活躍をする場所がすぐそこの手の届く所にあるように思えてなりません。

何かにつけて学園に皆さんが立ち寄ってくれるような雰囲気を作ること、これが校友会の重要な仕事の一つです。当面の大きなイベントとしては、新時代の期待を背負った【新宿テクノキャンパス】にて、永年の夢が叶ったことを祝って《本年の10月26日》に校友会の全国大会を《全国2000名大集会》と名付けて計画しております。ご家族と共に是非新しい私たちの学園を見に来て頂きたい。更に更に全国の校友諸氏の友情とご協力をお願い致します。最後になりましたが、各位のこの一年のご活躍とご健勝をお祈り申し上げます。

●ごあいさつ



新しい時代に向けて

理事長 北郷 薫

校友の皆様方におかれましては、ご健勝にてご活躍のこととおよろび申し上げます。

平成7年(1995年)5月に、本学園の新宿校地再開発工事第三期工事が竣工しました。この第三期工事による、公開広場(工学院大学エステック広場)および、同広場下の工事が竣工したことによりまして、昭和62年(1987年)7月に、第一期工事に着工して以来、8年に及ぶ本学園の一大事業であった新宿校地再開発工事が全て完了いたしました。

本学園の新宿校地再開発工事は、同校地で本学園の教育、研究活動を継続しながら遂行いたしましたので、それだけ期間も長くなり、余分の費用もかかりました。

しかし、これが最善の方法であるとの判断から、このように三期に全工期を分けて遂行したものであります。結果的にも成功し、すでに新校舎高層棟は、平成元年(1989年)から、中層棟は、平成4年(1992年)から活用しています。

工学院大学の新宿高層棟新校舎を知らない人は次第に少なくなっていると考えられます。

ご承知のとおり、日本の18才人口は、平成4年のピーク値205万人から急速に減少し続け、平成8年には172万人になります。この比率から見ますと、各大学学部、専門学校等への入学志願者は、平均してこの減少比率に応じて減少するはずですが、

事実、日本全体における統計的数字はこの傾向を示しているようですが、本学の大学学部への入学志願者数は、昨年(平成7年度)は、前年の6年度にくらべて5千人近くも増えました。この原因としては、本学が昨年度に初めて「入試センター利用」試験も導入して、ここに4,815人ももの志願者があったことがあげられていました。したがって、同制度導入2年目の本年度が試金石となる年

度であると見ていました。

私は、昨年と同じであれば十分であると言っていたのですが、本年度の大学第1部の前期一般入試志願者数は、前年度より1,744人増えています。「入試センター利用」試験の志願者は407人だけ前年度より減少しましたが、一般入試の志願者増がきいて、合計ではすでに約1,300人の増加であります。まだ、本年度は後期入試が残っていますが、最終的にも約1,300人の志願者増になると予想しています。

最近は大学院へも修士課程で200人をこえる入学者を確保できています。本学園の附属高等学校は、日本の15才人口の減少にもかかわらず、堅実に入学生を確保しております。

平成8年度から再開する附属中学校の評判も良いと聞いています。

本学園において、永い伝統を守っている専門学校は、現在、18才人口の減少の影響を強く受けていますが、本学園一丸となって専門学校を特色ある学校として隆盛に導くよう努力しています。

本学園は、平成8年度から同12年度(1996~2000)までの将来計画を「学園5ヶ年計画—ジャンプ21—」と名付け、いま、その計画に従って、全学園を21世紀へ向かって発展させるように活動を展開しています。

どうか、校友の皆様方におかれましては、皆様方の母校である本学園をご支援下さるようお願い申し上げます。

私達、本学園に現在、在職する者にとりましては、本学園の卒業生である校友の皆様方の社会の各方面における活躍を見るのが何よりの喜びであります。

校友の皆様方のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

● 講演紹介



## 日本の製造業はこう変わる

学校法人工学院大学顧問

(社)科学技術と経済の会常務理事

工学博士 只野 文哉

本文は1996年2月24日に開催された工学院大学電気系創立40周年記念講演会でお話したものの要約です。はじめに

私は大正15年(1926年)7月に、当大学の前身である工手学校電工科(夜間)を卒業いたしました。もともと工手学校は、東京京橋の築地にありましたが、大正13年(1924年)9月1日の関東大震災で焼け出され、この敷地にあった日本中学校の木造校舎に間借りして、夜間、

私たち勤労青年に技術の実科を教えていたのです。それから70年、学校も発展いたしました。世の中もすっかり変わりました。

そこでまず、日本の工業社会がどう変わってきたかという事からお話ししたいと思います。

### 1. 企業を取り巻く環境の変化

図1に見るように、1900年以來、長年続いた日本の経済成長は、'90年を境にして頭打ちとなりました。それ

と同時に賃金が米国に比べて、1.6倍と高くなり、インフラ経費も割高となって、海外特にアメリカや東南アジアといった需要地でモノを作るという動きが急ピッチで進んでおります。欧米と違い、日本では労働力が国境を越えて移動しがたいので、製造部門が海外へ移りますと、足下の製造業とくに裾野に当たる中小製造業の衰退が問題になって参ります。とはいうものの製造業の海外移転は進めねばなりません。

### 2. 米国産業界の変貌

米国の企業が息を吹き返しております。その起爆剤となったのは、1980年後半、マサチューセッツ工科大学(MIT)が実施いたしました、アメリカ産業の生産性向上プロジェクトでした。

この調査は、アメリカ企業の国際競争力低下の原因を、生産性の立場から検証したものです。皆様をご存知の通り、いまやアメリカの製造業は、リエンジニアリングとか、リストラクチャリングといった後ろ向きの贅肉落としを終え、成長(Growth)に向かって力強く走り出しております。

米国の企業は、'80年代に日本の製造業に追い越しされたことに危機感を募らせ、企業を活性化する経営マネジメント手段として「ベンチマーキング」を導入いたしました。

ベンチマーキングとは何ぞや、ということにつきましては、例えば「ベンチマーキングの理論と実践、ハーバード・ビジネス編集部」など好著がありますので、ここでのお話は省略いたしますが、一言で言うと「成功企業に学ぶ」というものです。私たちが、1955~1970年代にやったQC活動とよく似ており、「業界で評判が良く、業績の高い非競合企業を選び、ギブ・アンド・テイクの精神で、開発、製造工程の改善、効率化、自動化、外注加工費の削減、内製化、生産拠点の海外移転、人員削減などのBest Practiceを調べ上げて自社の生産性向上の指標とする」というものです。

表1に、米国の企業がベンチマーキングを始めたときの実施例です。

ベンチマーキングを効果あるものにするためには、Give and Takeの精神が大事です。もう一つ、最高の

図1. 先進国の工業生産指数—長期推移

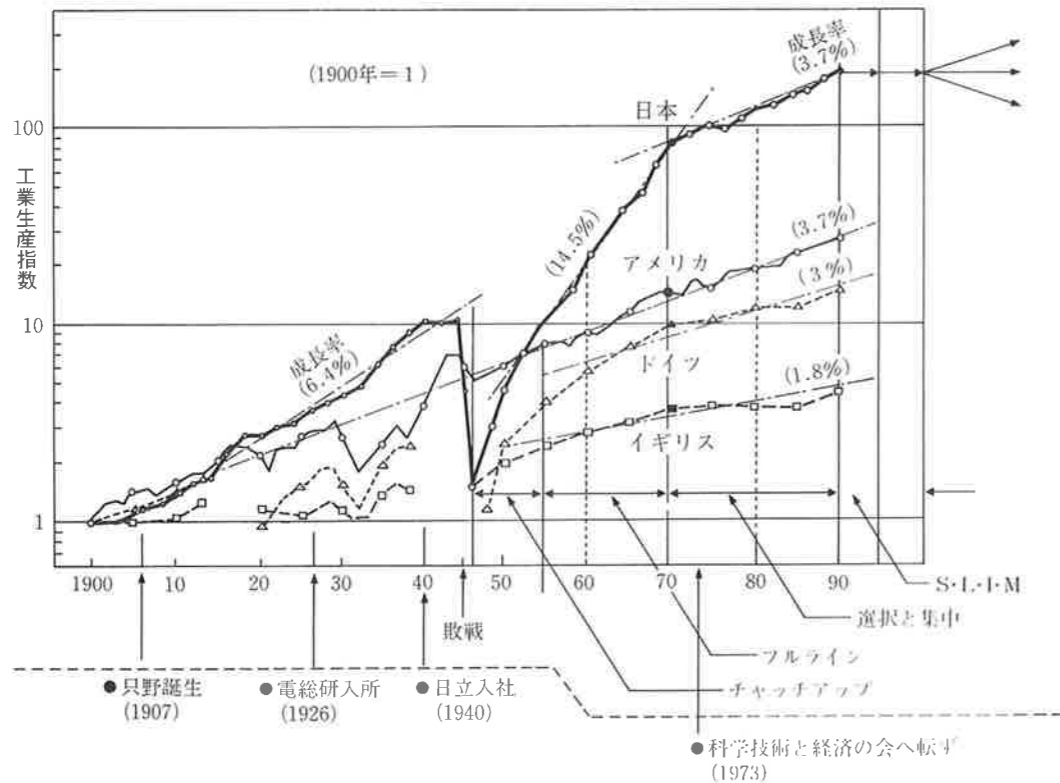


表1 アメリカ企業に浸透するベンチマーキング

導入企業	クライスラー	ヒューレット・パッカード	テキサス・インスツルメンツ (防衛システム・エレクトロニクス・グループ)
ベンチマーキング ターゲット	本田技研工業 GE 製造サイクル 受注・出荷サイクル	社内の他部門 新製品開発	同業他社 メアリー・ケイ*化粧品メーカー マリOTT*ホテル業 仕入業務 棚卸管理 CS(顧客満足)戦略
ベンチマーキング後 の効果	受注から出荷までのサイクルを8カ月間で、従来の80日から37日までに短縮。	(1)新製品の「インク・ジェット・プリンター」の開発において、当初目標の4年を1年10カ月に短縮。 (2)CADプログラムの開発において、当初目標6年を13カ月に短縮。	(1)納入業者数を、1800社(1990年)を1200社(1992年)に削減。 (2)100万当たりで見たデフエクト(欠陥)を、1万8000件(1988年)から、5700件(1992年)にまで減少させる品質改善に成功。 (3)仕入受注のサイクル・タイムを、従来の10日間(1990年)を、4日間(1992年)に短縮。
備考・その他	★1980年代の外国車の攻勢に対抗すべく、ベンチマーキングを導入。結果、品質、コスト、時間のバランスよい管理という果実を獲得。	★ベンチマーキング活動は、1986年から1994年まで継続された。	★1992年、マルコム・ボルドリッジ賞を受賞。 ★1994年、APQC(American Productivity and Quality Center)のIBC(International Benchmarking Clearinghouse)主催によるベンチマーキング大賞において、銀賞を獲得。

\*ベンチマーキングの理論と実践；ダイヤモンドハーバードビジネス12~13頁より引用

相手企業と手を組むことが必要で、それには、秘密主義を捨てて、自ら開示し謙虚に相手と協力し学び合うという協学の精神が基本です。顧みますと、ここ10年、私たち製造業は他に学ぶことを忘れ、「唯我独尊、世界一強いんだ」と自惚れすぎたのではないのでしょうか。

お互いに学ぶということから見て、今日の電気科同窓卒業生の集まりも、単なる「仲良しクラブ」で終わるのではなく、信頼を深める絶好の機会と捕まえ、お互いに手の内をさらけ出して学び合い協力し合うのだったらいいなあと思います。

### 3. 企業経営の見直し

品質がいい、サービスが万全、そのうえ世界一安い、ということで世界のマーケットを席捲してきた日本企業独自の経営が壁に突き当たってしまいました。輸出超過一黒字拡大一円高一コスト高騰一製造拠点の海外移転一国内企業の空洞化、という悪しき循環が起こっております。

#### (1) 企業間過当競争の反省

今日の日本経済発展の原動力は、「日本人の勤勉さと企業間競争による活力」だったと思います。その一方で、ある製品が儲かると分かると、多くの企業が雪崩を打って参入し、過剰設備投資一過剰生産一値下げ競争一収益低下一赤字転落という、シェア獲得・欲ボケ競争に陥っております。

日本の製造業は、横並びの過当競争から脱却しないと、いたずらに経営資源を浪費することになってじり貧となります。

#### (2) Dry 製品と Wet 製品

私たちが私用、公用を問わず、モノを購入するとき、あの会社の製品を買いたいというモノもあるし、どこの製品でもいい、安くて長持ちさえすれば、というものもあります。私はこのような購買心理を次のように言っております。

**D r y 製品**：例えば普通の家電製品のユーザーは気の赴くまま Dry に、A 社製品から B 社製品に切り替えることが出来る。サービス、使い勝手の良さ、品質、性能、価格が似たり寄ったりだからである。

**W e t 製品**：例えば V T R やコンピュータがそれで、エンドユーザーはソフトに縛られ、一度ある機種を購入すると、ソフトに縛られ他社製品への切り替えが出来なくなる。de-factstandard 製品もその1つで、パソコンや O A 機器をはじめとして、O

A、F A、L A N などの上位情報システムは皆 Wet 製品である。

今後の事業展開に当たっては、いかにして一度掴んだ顧客を引き留めるかの Wet 製品戦略が大事となります。

#### 4. コア製品の活性化と新規製品の開発

基幹事業 (Core Business) で着実に利益を上げ、新規事業 (Wet Business) を育てていくのが事業経営の基本であることは申し上げるまでもありません。コアビジネスが火の車になってからの事業転換は、従業員の大幅削減などの激痛を伴います。

わが国には明治以来、造船や鉄鋼工業、重機械工業、建築、土木などで蓄積してきた膨大な人材と基盤技術があります。それらの成熟技術とハイテク技術、特に最近の情報通信技術と組み合わせをうまくやれば、応用範囲は実に広く、事業の発展は「やる気次第」と言っていでしょう。

新製品や新事業の開発で大事なことは「はじめに仮説ありき」(シャープ(株)顧問 佐々木正氏：クレスト社出版/1995年11月)を原則とすることだと思います。「こうなるだろう」、「こうなるに違いない」という仮説をたてて、一步一步着実にその実現に向かって開発を進めていくのです。

私は1940年、日立製作所の研究所で電子顕微鏡の研究・開発に手をつけました。その時の仮説は、光学顕微鏡では見ることの出来ない千分の1ミリメートル以下の微小なモノを見ようということでした。55年たった今、千万分の2ミリメートルという微小体まで見る事が出来るようになりました。そして思いもかけず、私の後輩が着想した測長型・走査電子顕微鏡が今、ミクロン加工を必要とする半導体 I C 工場の生産ラインにずらっと並んで使われているという盛況で、まさに私の仮説が実りつつあると言っていでしょう。

#### 5. むすび

世の中で必要とされる企業は繁栄し、必要とされなくなった企業は衰退するのは、世の習いです。いま日本の産業界には、I T (Information Technology) 革命の嵐が吹き荒れようとしております。技術、経済、社会、国際環境は日に日に変化しております。皆さんはその変化に前向きに取り組み、実行に移し、辛抱強く成果の上がるのを待つ覚悟が必要です。時には、リスクのあるベンチャーリング活動も必要でしょう。それが、いつしか会社の繁栄に繋がっています。

皆様のご繁栄を願って私の話を終わります。

## ● 同好会だより

### ソーラーカーの開発

工学院大学専門学校主理 住野 和男

人類は火を発見して以来、薪や木炭などをエネルギー源としてきました。産業活動が活発になると石炭が利用されるようになり、現在では石油、天然ガス、水力、風力、原子力等のエネルギーが加わり、その中でも安価で便利な石油がエネルギーの主役になっています。これらのうち石炭、石油、天然ガスなどは化石燃料と呼ばれ、あと数十年から数百年のオーダーで枯渇してしまう有限なエネルギー源なのです。

そこで、昨今話題になっている省資源、無公害である自然エネルギーの積極的利用が早急の課題となっています。その中でも私達は太陽エネルギーの有効利用を積極的に推進しております。

太陽から送られてくる光と熱は1時間で、今日世界で消費している1年間のエネルギーの2倍に相当するエネルギー量があり、地球表面では1平方メートルあたり約1KWのエネルギーに相当し、クリーンで永久に使用できるエネルギー源だからです。

私達はこの太陽エネルギーの有効利用と未来の



可能性を追求するために、2年前から「ソーラーカー」に関する技術開発に取り組んできました。

学生達は車という乗り物に非常に興味があり、太陽エネルギーを動力として走行できる「ソーラーカー」を製作することにより、学生達の工学的知識の探求、省エネルギーに対する認識や、今日私達が直面している環境問題への関心を深め、エネルギーの大切さ、物造りの楽しさを経験を通して学ぶことができます。

「ソーラーカー」は新しい乗り物として今日注目されるようになり、各地でイベントや競技会が開催されるようになってきました。私達は2年前からこの種の競技会へは、既にある「省エネカー」(1リットルのガソリンで何キロ走行できるかを競う競技車)を「ソーラーカー」に改造して出場してきましたが、「省エネカー」との共用であるため何かと不便を感じており、新しい「ソーラーカー」を製作することにしました。

製作は、10月に千葉県の幕張で開催される「朝



日ソーラーカー・ラリー」競技会への出場を目標に、新入部員が入った5月から設計を始め、夏休みを返上しての製作となりました。

車造りに関しては、今までの「省エネカー」で蓄積された製作技術はありますが、今回はフレームを使用しないでボディとシャーシを一体にしたモノコックボディ構造としたり、材料にはカーボンファイバーとケブラー材を使用するなど、新素材と新構造に挑戦しました。これは車造りに最も大切な軽量化に十分役立ち、強度も十分に確保することができました。

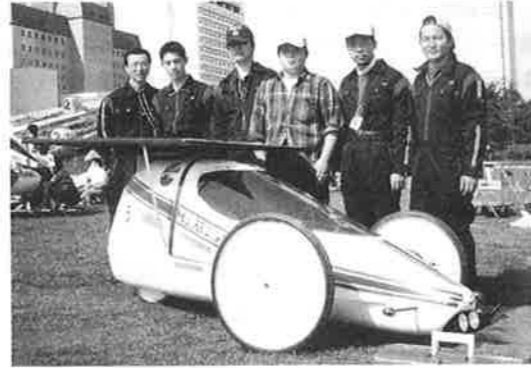
太陽電池には最大総発電量224.5W（44.9W×5枚）の単結晶シリコン太陽電池を使用しました。モーターは600Wの直流モーターを使用し、速度制御にはPWM制御方式を採用してスムーズな加速を実現しました。また、蓄電池を搭載して走行中はバッテリーに充電しながらの走行が可能です。

音もなく、太陽が当たっている間中走行できる「ソーラーカー」は正に近未来の車と言った感じです。

完成したのは競技会2日前でした。早速テスト走行を早朝に行いましたが、トラブル続出です。ブレーキの効き具合が悪い、ギヤ比の設定が悪い、駆動系の強度不足によるチェーンの脱落等……この中でも、チェーンの脱落が一番問題でした。強度不足による駆動系の変形だったからです。大幅に改良しなければなりませんでした。

早速車を持ち帰り、改良が始まりました。徹夜作業の末、大会前日の夜遅くになんとか完成しました。もうテスト走行を行っている時間はありません。仮眠をしてから積み込み作業を終え、大会会場に直行です。車に対する不安を残したまま……。

大会当日、正にソーラーカー日和と言うのにふさわしい快晴でした。組立調整後、車検も無事にパスして学生達も今までの苦勞が吹き飛んだ様子



でした。

今回出場した「朝日ソーラーカー・ラリー」は朝日新聞社が主催し、エネルギー問題、環境問題への関心を高める目的で開催されている競技会で、今回で7回を迎えます。開催は平成7年10月9、10日千葉県の幕張を会場にして2日間の日程で行われました。1日目は「ソーラーカー」の展示、車検、最高速競技とブレーキテスト、そしてテスト走行が行われました。2日目はジムカーナ競技とラリー競技の2種目で競われ、2日間の総合点で順位が決定します。

私達は学生クラスで参加し、学生クラスで6位、総合で20位という成績で、学生共々満足のいく結果を得ることができました。

当日は、朝日テレビの取材があり、その日の夜の番組で放映され、学生達にとって良い思い出になったことと思います。

思えば設計から始まって製作まで約半年間、私も学生達も目的に向かって気力で頑張ってきました。いっしょに頑張ってきた学生達も、この春には社会人となって巣立って行きます。今後は、学生達がこの経験を活かし、どんな困難にも立ち向かって活躍してほしいと願って止みません。

この「ソーラーカー」を製作するに当たり、校友の皆様方のご理解、ご協力がありましたことを申し添え、ここに深く感謝申し上げます。

## ● 学園だより

### 開かれた学校法人工学院大学をめざして

前 学務・企画担当常務理事 大勝 靖一

#### 学園の最近の動き

本学園は、新しい学園の在り方を模索する中で、開かれた学園と産官学の協調を柱に教育・研究を進めるべく種々の施策を行いつつある。4月より工学院大学附属中学校を開設したが、これは高校の定員を中学校に振り代え、一学年80名の規模でスタートする。中味は、附属というよりも他大学への進学を意識した、しかしゆとりあるカリキュラムで中・高一貫教育を行うというものである。また一方で一昨年4月には、大学院の更なる拡充を目指して、情報学専攻を新設し、修士課程と博士後期課程とを同時に開設した。この専攻は大学院設置基準の14条特例を生かした昼夜開講制を敷いており、企業の実務を必要とするが、在職したまま大学院に進学できる道を開いた。この制度は、続いて機械工学専攻、工業化学専攻、建築学専攻に、さらに本年4月からは電気工学専攻にも認可される運びとなった。定員もここ数年で大学院全専攻修士課程の合計で一学年190名の規模にまで拡大した。このように本学園では教育組織を上下に延ばし、社会の人口動態に適合した教育体系に整え、更には中味の充実を計って社会の要請に応える努力をしている。

周知のように学園の新宿校地の開発は昨年5月に無事完了した。この開発に伴って学生募集を一時中断していた第二部（夜間教育）を再開して、昨年3月には初めての卒業生を世に送り出した。この第二部は旧来とは違うカリキュラムで運営されているが、まだ不十分なところもあり、大橋学長のもとで改革されつつある。新第二部は単なる技術者の養成を目指したものではない。在来の工

学教育体系ではどうしても網羅できない複雑な社会の変革の中で、「工学的知識と文系的発想の融合」という考えのもと、文系大学出身者の中で工学を学びたいと思いついた社会人や進路を再選択したいと考えている社会人に対して門戸を開いたのである。その広報の効果が徐々に出てきており、昨年4月には1学年の定員430名の約20%に迫る社会人が編入学試験に合格し、入学した。

#### 生涯学習への積極的取り組み

現在、自分自身を研鑽しようとしている社会人は非常に多い。学園はこのような社会人に対して、「随時学びたい時に、学びたいことが学べる」という生涯教育の機会を提供する責務があると考えている。また大学院においても、社会人対象の専門講義を行い、企業で実務を担当する者と学識者との意見交換の場を持つことが必要であろう。

本学園企画部の「生涯学習センター」による社会人向けの公開講座は昨年で7年目という実績がある。多くの大学で同様の催しが行われているが、本学の講座は評価が高い。多くは工学系の講座という側面はあるが、社会の直面している問題をシリーズで取り上げ、いろいろな角度から、また幾分掘り下げて講義しているからであろう。それに加えて更に一昨年より工学院大学大学院公開講座を始めた。上述したような立場から幾分レベルの高い講義である。

実はこれらの公開講座も最初の頃は苦勞が多々あった。予定を下回る人数しか来てくれないこともしばしばあった。しかし回を重ねるにつれて聴講者の数も増加し、今ではどの公開講座をとっても定員を越える盛況である。多い時には、300名

の定員に対して550名が参加したために別教室を準備したこともあり、ますます期待が高まっている。

大学は、全国各地において父母懇談会を開催している。大学の教職員はこれらの会に出席し、各地における生涯教育の在り方について些かでも認識できる機会を持っている。結論から言うと、大変貧弱なことではあるが、各都市の生涯教育に対する取組方は非常に前向きであるにも拘らず、予算的裏付けが不十分であることを知った。このような状況にあって、本学園は、本学園の公開講座を聞けない遠方の社会人に対して本学園の知的財産を提供するために、昨年より「出張公開講座」を始めた。昨年度はどの程度の反響があるか分からなかったのが、主に関東以北の諸都市に働き掛けをしたが、12件の講師派遣の要請があり、大学の先生にご足労頂いた。あまり教員の負担にならないように配慮しつつ、本年度は幾分呼び掛けの都市数を増やす積もりである。

#### 地域との連携

本学園は、学園全体として社会と連携するいくつかの催しを行っている。八王子校地で行われる「大学の先生と楽しむ理科教室」は、大学の教員が主体となっているが、高校・専門学校の教員の協力も得て開催されている。小・中学生が自分の手で、物に触れ、また物を観察しそして作る喜びを知ってもらうことにより、子供達の理科離れを幾分でも食い止めようとする努力である。昨年度は8月に2日間開催したが、5000人を越える人が集まった。この催しは近隣都市の教育委員会の後援を得、まさに教員、事務職員、学生が一体となって、またボランティア的に行っているものであり、頭の下がる思いである。アンケートによれば、この催しは非常に好評で、毎年の開催を望む声が多い。一方規模は小さいが、日野市教育委員会の要

請を受けて、日野市の小学5、6年生を対象にした理科教室にも協力している。昨年は2年目になるが、高校と専門学校の先生が理科実験の指導を行い、小学生に好評を得た。本学園のこのような地道な企画が子供達の理科への興味を引き出し得たとしたら、将来の本学園、しいては日本にとって非常に喜ばしいことである。

一方専門学校は、日本工業新聞と協力して社会人に対する生涯教育に取組むため、職業人再教育研究会を発足した。短期間（3～6か月）の講座を用意し、社会が必要とするテーマをタイムリーに取り上げ、専門学校生徒数の減少に対処しようとするものである。当面「木造建築の耐震化」、「インターネット」等の講座開催により、職業人の再教育に取り組むことになった。専門学校の活性化、経営基盤の強化を計る初めての試みである。その他の施策

大学では、全国約6000高校に対して、大学への推薦入学とクラブ活動のための賞金を付した「理科学クラブ研究論文」募集という理科教育の啓蒙活動を行っている。100論文程度の応募があり、昨年度は4人の推薦入学を認めた。この企画は地味ではあるが、工学院大学の知名度を上げるのに効果的に働いているようである。

以上、学校法人工学院大学の社会に対する働き掛けの現状とそれに対処するための学園の体制について概述してきた。これで十分と言うわけでない。以後、実績を踏まえ、本学園本来の教育に支障のない限り、地道な広報活動をしたいと考えている。このような活動を通じて本学園の社会における存在意義がますます高まり、高い評価がえられるようになるかと信じている。校友の皆様のご支援・ご理解を願い、また新しい提案を待つ次第である。

## ●支部だより

### 平成7年度支部総会報告

平成8年1月迄に36支部にて開催されました。支部活動も年毎に活発になって参りましたので、

今回は支部より送って戴いた写真によってご紹介しました。元気な皆様の様子をご覧下さい。



95.4.16 長野県支部総会 於松本市東急イン



95.6.11 埼玉西支部総会 於東松山市紫雲閣



95.9.10 北海道支部総会 於札幌市ホテルKKR札幌



95.6.25 熊本県支部総会  
於熊本市産業文化会館



95.5.21 栃木県支部総会  
於宇都宮市ホテルニューイタヤ



95.9.30 (写真の日付は誤) 青森県支部総会(新旧支部長) 於八戸市はちのへハイ



96.1.27 愛知県支部新年会 於名古屋市メルパルク名古屋

## 平成8年度支部総会開催予定

会報の原稿締切日現在でご連絡ありました支部総会の開催予定は下記の通りです

清水建設支部	4/10 (水)	千葉県支部	7/7 (日)
	清水建設本社内 18:00		ちば玉姫殿 12:00
岐阜県支部	4/13 (土)	青森県支部	7/27 (土)
岐阜市	岐阜キャッスルホテル		青森県東通尻屋 15:30
山口県支部	4/14 (日)	島根県支部	9/7 (土) 浜田市 15:00
宇部市	国際ホテル宇部 12:00	長野県支部	9/14 (土)
栃木県支部	5/19 (日)		上田市 ささや 17:00
宇都宮市	ホテルニューイタヤ 13:30	北海道支部	9/14 (土) 札幌市 18:00
岩手県支部	5/25 (土) 盛岡市 14:00	台湾支部	9/30 (月)
宮城県支部	6/1 (土) 未定 17:00		台北市内 餐廳 18:30
大阪支部	6/1 (土)	八南支部	10/5 (土)
	奈良猿沢荘 18:00		八王子労政会館 17:00
山梨県支部	6/21 (金)	日本電気支部	10/25 (金) 18:00
甲府市	シティプラザ紫玉苑 18:30	東京支部	10/26 (土) 新宿校舎 11:00
東京新宿支部	6/22 (土)	新潟県支部	11/3 (日)
	工学院大学新宿校舎内 18:00		新潟駅前 安兵衛 13:00
埼玉県西支部	6/23 (日)	大分県支部	11/9 (土)
	東松山 紫雲閣 15:00		大分市 豊後灘 17:30
熊本県支部	6/23 (日)	京滋支部	11/23 (土) 京都 15:00
	産業文化会館 13:00	中野支部	11/中旬予定 18:30
高知県支部	6/29 (土)	静岡県支部	9月以降開催予定 浜松
	高知市 魚竹 18:00		
東芝支部	7/5 (金) 新宿校舎 17:00		
神奈川県下5支部	7/6 (土) 14:00		

(お願い) 支部の皆さん、総会の様子など写真を添えてお知らせください。

## 盛況！工院大異業種懇話会

校友会 京滋支部

京滋支部からお便りします。

我が京滋支部は昭和54年12月に大阪支部の北摂地区、京都府、滋賀県の会員で分離設立され、現在2代目の支部長伊藤肇氏(昭和40年卒)のもと会員数約130名の若い支部です。

初代支部長は大先輩石川太一氏(大正10年卒・現顧問)をお願いし、第5回全国大会(京都大会)を大阪・兵庫支部のご支援のもと、開催した由緒正しい支部(?)でございます。

その後の支部活動は夏の納涼会、冬の忘年会、総会等の親睦を中心とした、やや低調でマンネリ化したお恥ずかしい状態です。

会員数はかなり居るものの、出席者はいつものメンバーで、何か支部活動を活性化させる(その様な大げさなものでないが)良い妙案はないものかと、昨年の総会時に意見がありました。

そこで飲み会で色々と話題になる、各人が持っている専門性や情報をほんの少し真面目に発表しあい、相互啓発を行う場作りをしようではないかと…名称は大きく「工院大異業種懇話会」と名付け、3カ月に1度の第2土曜日に開催することにしました。

これで、飲みに行くのでなく学習に行くのだと、家族にも胸を張って出かけられると言うもの…(なかなかの迷案)

第1回は支部長伊藤肇氏(昭和40年設備卒)の



「某大社の改修工事秘話」、第2回は樋口勇氏(昭和37年電子卒)の「PL法まもなく発効」、第3回は鮫島貞一郎氏(昭和38年工化卒)の「フロン代替え洗剤について」、第4回は澤井年治氏(昭和40年機械卒)の「合繊機械の高速ローラー」と1時間程度の熱演と質問や情報交換となかなか真面目な取り組みとなりました。その後の酒を入れての懇話会では楽しい語らいと次回のテーマを選び懇話会の終了となります。

校友での気安さで、それぞれの専門性や経験談を披露していただく事が、メンバーの貴重な糧となり、参加する事に意義を感じていただければ幸いです。ただの同窓会でなく、集まる目的とか、何かメリットがある会になる事を望んでいくところです。

1年間を振り返れば、参加メンバーが少しずつ増えてきた事と、PL法の樋口氏がこの懇話会の縁で、日本機械学会や滋賀県機械金属組合のセミナーでの講師として招かれ、懇話会の輪が少しづつ広がって来ており喜んでいきます。

次回は村崎裕氏(昭和46年電気卒)の「オープン化に向けてのPLCの動向」を2月に開催予定です。案内状の発送数も増やしていく予定です。

お問い合わせ 0775(89)2169

木村左右吉(昭和41年機械卒)